

2001年度前期教養的科目履修登録に関する アンケート調査分析

金沢大学教育学研究科学校教育専攻 野口政親

本報告は、研究調査部が昨年(2001)度、教育学研究科院生の野口氏に依頼した、2001年度前期「履修登録に関するアンケート」の調査分析である。本報告は昨年秋に提出され、現在、教務・学生委員会に送り、今後の制度改善の参考とすることになっている。なお、本誌掲載に当たっては、古畑の責任で若干の内容を省略した。
(記：研究調査部長・古畑徹)

1. はじめに

金沢大学では、教養的科目履修登録方法の改善の一環として2000年度より、履修登録時に優先受講票を3科目まで申請することができるという履修登録方法の一部改正を実施した。同時に、更なる履修登録方法の改善を目的として学生による教養的科目履修登録評価を実施すべく、具体的な検討を進め、その結果、教養的科目の「履修登録に関するアンケート」を実施することとなった。現在(2001年秋)まで、2000年度前期・2001年度前期の計2回アンケート調査を行っており2000年度前期「履修登録に関するアンケート」の結果は『研究調査部報』第5号に詳しい。この報告は2001年4月に調査を実施したものについての調査結果を分析・報告するものである。

2. 教養的科目における優先受講票交付制度の趣旨と導入の経緯

この制度の趣旨と経緯は『教養的科目の履修手続の変更(優先受講票交付制度の導入)について(在学生用資料)』が詳しいのでその内容を引用する。

従来の履修手続では、履修カードにマークできる履修希望科目を決定するためには、シラバス等を読んで履修希望科目を自分で決めた後、学期開始第1週目に行われる科目ガイダンス時に、授業科目担当教官にその場で受講票を手渡し、受理されなければなりません。このとき、多くの授業科目で抽選による受講者調整がおこなわれますが、抽選時あるいは抽選漏れした学生の移動時に混乱が発生することがしばしばありました。また、是非この科目を受講したいという学生が抽選漏れしてしまう一方で、時間割の穴埋めのために受講を希望したという学生が抽選に当たってしまうというようなケースもしばしば見られ、こうしたことの改善がかねてより学生からの希望とし

てあがっていました。

教養教育機構では、平成8年度以来「教養的科目の見直し案」が検討されていましたが、平成10年3月にそれが公表され、その中に上記事態の改善案が提出されました。その後、さらなる具体的検討を経て、平成11年12月に、平成12年度から上記事態の改善のために「優先受講票交付制度」を導入することが決定されました。

3. 優先受講票のしくみ

同じく『教養的科目の履修手続の変更(優先受講票交付制度の導入)について(在学生用資料)』をアレンジして優先受講票のしくみを説明する。

まず、優先受講票の定義は以下の通りである。受講希望者が適正人数を超えて抽選で受講者調整が必要になった場合に、抽選を免除されて優先的に教官から受講が認められる特別な受講票を優先受講票という。なお、対象学生は全学年生であり、この制度の実施時期は毎学期の初めである。優先受講票の交付対象となる科目は、総合・テーマ別・一般・言語の各科目区分に属する授業科目で、受講者調整の方法を抽選とするものに限られる。また、上記の条件にあたる授業科目でも、集中講義や開放科目(専門科目としても履修登録ができる教養的科目のこと)という形態のものも交付対象とはならない。

優先受講票手続手順は以下の通りである。

優先受講票は毎学期3枚(3枚で1シート)まで交付を受けることが可能であり、交付を受けるには、学期開始前の所定の期日までに、履修登録を希望する授業科目(3科目以内)を記した優先受講票交付願(マークカード)を総合教育棟学務係に提出する。ただし、交付希望者数が交付可能者数を超過した授業科目については、大学側で交付者調整を行い、確定した科目にのみ優先受講票が交付される。交付者

調整の方法は、まずその授業科目の対象学生に合わない者を除外したうえで、抽選方式でアトラダムに選出することとなっている。よって、全て希望どおり交付されるとは限らない。なお、優先受講票交付日は、前期は新入生の履修ガイダンスの日から科目ガイダンス最終日まで、後期は成績通知票交付日から科目ガイダンス最終日までとなっている。この交付された優先受講票は普通の受講票（白色）と区別するために、朱色の用紙を使用しており、必要事項は全て印刷されている。（よって、原則改ざんを防げる）シートで渡され、切り離して使用するものである。

学期開始第1週目の科目ガイダンスの時間（本来90分授業時間を前半40分、移動休憩10分、後半40分に分けて、前半に落とされた人が、後半まだ受講者の受け入れが可能な授業を探して受講できる時間）の前半に、優先受講票を教官に提出するとその効力を発揮する。科目ガイダンスの後半以降は優先受講票の使用はできない。

優先受講票は、抽選免除という特典以外は普通の受講票と同じであり、科目ガイダンス時に教官に手渡さなければ、受講許可は得られない。一方、その後の履修カード提出時にマークしなかったり、履修許可表確認時に訂正したりすることで、履修をとり下げることができる。なお、受講者調整の方法をスクリーニングテストとする授業科目に対して優先受講票の交付を申請した場合、優先受講票は交付されるが、有効性は保証されておらず、これを認めるか否かは各教官の判断にゆだねられている。

4. 調査の概要

調査の概要は以下の通りである。

調査期間：2001年4月

調査対象：2001年度入学生

調査方法：4月の履修ガイダンス時に1年次学生全員に配布・履修カード提出時に回収

回収結果：回収率36%（685名から回答）

調査項目：

I フェーズ項目 予備設問 学部・学科コード

II 優先受講票交付願の提出と交付に関する項目群

設問1（1）優先受講票申請科目数

（2）交付されなかった優先受講票科目数

（3）優先受講票の申請とその結果についての具体的授業科目列挙

III 優先受講票制度の評価に関する項目群

設問2（1）優先受講票制度継続の可能性

（2）今後申請できる科目数の増減可能性

（設問2（1）で1. 今後も継続すべき制度であると評価した人のみの限定設問）

IV 履修登録（教養的科目）授業科目数、履修希望して

いたにも関わらず履修登録できなかった授業科目

数・具体的授業科目名及びその理由に関する項目群

設問3 教養的科目のうち履修登録した授業科目数

設問4 履修希望であったのに履修登録できなかった授業科目数

設問5 履修希望していたにも関わらず履修登録できなかった具体的授業科目名とその理由

V 履修登録についての自由回答項目

設問6 履修登録について意見や具体的な改善策など回答

VI 『シラバス』『履修案内・授業時間割表』についての自由回答項目

設問7 『シラバス』『履修案内・授業時間割表』など意見・改善提案など回答

5. 調査結果の概要

以下で、調査結果についてその概要を報告する。調査項目順に（I）学部別回答用紙回収率、（II）優先受講票交付願の提出と交付、（III）優先受講票制度の評価、（IV）履修登録（教養的科目）授業科目数・履修希望していたにも関わらず履修登録できなかった授業科目数・具体的授業科目名及びその理由、（V）履修登録についての自由回答、（VI）『シラバス』『履修案内・授業時間割表』についての自由回答について順次検討していきたい。

なお、自由回答は公表することを前提に書かれてはいないので、対象科目名、教官名など固有名詞は省略している。また、1人が一つの自由回答に複数の内容を綴った回答をした場合、種類別の分類を実施した。よって、文章を少し加工しているものもある。重複している意見は全てを載せてはいない。

（I）学部学科コード別回答用紙回収率

学部等	文	育	法	経	理	医	薬	工	計
対象学生数	177	213	224	212	189	300	92	500	1907
回収枚数	63	72	67	88	75	109	50	161	685
回収率(%)	36	34	30	42	40	36	54	32	36

回答用紙回収率は、上表に示されているように、全体としては、36%であった。

昨年度（2000年）前期に実施した同アンケート回答用紙回収率は全体として44.9%であった。履修ガイダンス時から、回答用紙提出日まで時間的に経過

していることもあり、アンケート回答用紙紛失や提出当日持参しなかったとの推測もされるが、回収する際には、履修カードとアンケート回答用紙を同時に提出しなかった学生に対して新たな回答用紙を配布してアンケート協力をお願いをすることなどで回収率を上げ、今後の分析・検討につなげる必要があるように考える。学生にとっては、履修登録方法の改善につながる手段として積極的にアンケート回答をすることにより、自分達にメリットがあるという広報活動も必要であろう。ちなみに、教育改善のための新生向けアンケートでは回答用紙回収率は本年度9割を超えるものであった。このアンケートは新生向けの教養的科目履修ガイダンスの時間を利用し実施・その場で回収したこともあり、回収率が高いという結果になった。先ほども、アンケート用紙配布から提出までタイムラグがあることは述べたが、その期間に履修登録相談窓口を設け、同時にアンケート提出のお願いや学生の生の声を聞く機会にするなど工夫することによって回収率を上げることも一つの手段ではないだろうか。

(Ⅱ) 優先受講票交付願の提出と交付

設問1 優先受講票交付願(朱色のマークカード)の提出と交付についておたずねします。

(1) 交付願では、何科目分の優先受講票を申請しましたか。

回答者全体の内 85.84%つまり5人に4人以上の学生が優先受講票交付制度のリミットである3科目を申請している。ちなみに、昨年度の同調査では80.56%の学生が3科目申請をしている。昨年度に比べ本年度では回収率が低くなったこともあり、分母(アンケート回答用紙提出学生数)の違いのため単純比較することはできないが、データ上ではいずれも8割を超える学生が優先受講票交付の申請をし、その恩恵を受けようとしていることがわかる。なお、1科目も申請しなかった学生が回答者全体の10.36%存在する。昨年度の同調査では13.23%であった。分母の違いのため単純比較はできないが、1割強の学生は優先受講票の恩恵を受けていない。履修登録の可能性が高い少人数の授業科目を意図的または偶然に履修するのか、あきらめているのかはこのデータからは読み取ることはできない。しかしながら、優先受講票交付制度が2年目を迎えたことや新生ガイダンスや掲示等でこの制度を認識していない学生が1割もいることは考えにくく、自主的な判断でこの制度を敢えて利用しない学生がいることは確かである。

なぜ、この制度を敢えて利用しない学生がいるのかについては今後アンケート項目の追加で分析できよう。

(2) そのうち優先受講票を交付されなかった授業科目はいくつありましたか。

自分の意志で敢えて優先受講票を申請しなかった学生に対しては、その理由を今後の参考としてアンケート項目に追加するという措置で対応しても当面問題はない。しかしながら、この制度を理解しその恩恵に預かろうとしている学生の内、3科目申請したにもかかわらず3科目とも優先受講票を交付されなかったという事実があり、問題である。今回の回答者全体に対する割合として2.90%、人数にして18人もの学生が1科目もこの恩恵を受けられないのである。昨年度の同アンケート結果では2.11%、人数にして偶然同じく18人であった。また、本年度2科目優先受講票を交付されなかった学生が回答者全体に対する割合として6.45%、人数にして40人も存在することがわかる。この学生はことによると2科目申請しその2科目全てが交付されなかった学生を含んでいる可能性がある。また、1科目申請・1科目交付されなかった学生も存在する可能性があることを否定できない。今後の課題としては、少なくとも3科目申請者が3科目全て交付されないという不条理を解消するために「敗者復活」制度を実施すべきであろう。また、2科目申請や1科目申請をしたにもかかわらずまったく交付されないというケースも解消する必要がある。ことによると、優先受講票を申請したにもかかわらず1科目も交付されず、普通に履修登録をする際にも、スクーリングテストやじゃんけん等の選抜に漏れ続ける学生がいないとも限らない。そうなると、学生の授業に対するモチベーションが下がり、履修登録のストレスといった、学業本来とは関係ないことでストレスを抱えてしまうということが起こり得る。今回のこの制度によって解消されると思われていた問題が、一部の学生にとって未だ解決されない事態となる可能性がある。

なお、無回答が65人となっている点に言及しておく。設問1(1)で「交付願を提出しなかった場合は「0」を記入し、設問2へ進んでください」としてあるので本来ならば設問1(1)の優先受講票0科目申請者が71人存在するのでこの設問1(2)では無回答者が71人と同数にならなければいけないが65人となっている。すると6人が優先受講票非交付科目数に回答した可能性がある。あえて仮定するならば、0科目と回答したのではないか。よって、0科目と回答した人数には若干の誤差が存在している

と考えてよいのではないか。つまり、優先受講票非交付科目数0科目者が387人－(71人－65人)＝381人となり回答者全体に対する%も分母が620－6＝614ということになる。よって $381 \div 614 = 62.05\%$ となる。

(3) 優先受講票の申請とその結果について、右頁上の表に具体的な授業科目を挙げて答えてください。「結果」の欄については、下記に従って番号で記入してください。

1. 優先受講票が交付され、それを教官に提出した。
2. 優先受講票は交付されたが、実際にはそれを教官に提出しなかった。
3. 優先受講票は交付されなかったが、普通の受講票を教官に提出し受理された。
4. 優先受講票が交付されず、普通の受講票を教官に提出したが、受理されなかった。
5. 優先受講票が交付されなかったので、受講をあきらめた。

まず、設問1(1)で優先受講申請科目数が合計1810科目であり、設問1(2)では優先受講票非交付科目数が309科目であることがわかった。すると交付された優先受講票科目数は $1810 - 309 = 1501$ 科目数ということになる。そこで、設問1(3)「結果」1および2の合計は優先受講票を交付された科目数ということがいえる。1が1327科目、2が108科目、合計1435科目となった。このことは、上記の交付された優先受講票科目数より66科目少ない科目数になった。また設問1(3)「結果」3・4・5の合計は優先受講票を交付されなかった科目数ということがいえよう。「結果」3が19科目、4が10科目、5が180科目、合計209科目となった。このことは設問1(2)優先受講票を交付されなかった科目数合計309科目より100科目少ない科目数である。優先受講票を交付された科目数および交付されなかった科目数、いずれも許容範囲内の数字であるということがいえる。「結果」1、3はいずれもその科目については履修登録が確定されたものであり、履修希望がかなえられたということであり問題はない。問題なのは、「結果」2の優先受講票が幸運にも交付されたにもかかわらず、シラバスでイメージしていた科目と実際の科目内容とのミスマッチなのか教官にそれを提出せずその科目については履修登録しない科目数が108科目も存在することである。その科目内容の内訳は各学部必修である言語科目が80科目ともっとも多く、テーマ別科目人間に属する生涯スポーツ演習が11科目、一般科目自然に属する情報処理

演習が3科目、総合科目1科目、テーマ別科目・一般科目に属し生涯スポーツ演習や情報処理演習ではない講義形式の科目が13科目であった。優先受講票申請時期が科目ガイダンス前であるのでシラバス等の情報を参考に申請しなければならず、実際に科目ガイダンスを聞いて自分のイメージした科目内容ではなかったか、申請以降の情報により科目希望を変更したのかはこのデータでは定かではない。なぜ、優先受講票を交付されたにもかかわらず、実際にはそれを提出しなかったかについては調べる必要があろう。必修科目である言語科目を優先受講票が交付されているにもかかわらず提出しないということは、よほどの状況の変化や決定的な要因がないとできないことであると推測される。それが、シラバスの記述に問題があれば改善する必要があるだろうし、他に問題があればその分析・検討も必要であろう。なお、「結果」5の優先受講票が交付されなかったので受講をあきらめた科目が180科目にものぼっている。上記の「結果」2の優先受講票を交付されても実際にはそれを提出しなかった科目数は108科目もあり、受講をあきらめずに教官に優先受講票を交付されなかったがどうしても受講したいという旨を伝え、優先受講票を敢えて、提出しなかった学生がいれば受講するチャンスがあるということである。その科目で優先受講票を教官に提出しないケースが発生するか、受講者自体が少ないかという偶然にも左右されよう。あくまでも、マッチングの問題である。その証拠として「結果」3では優先受講票が交付されなかったにもかかわらず、普通の受講票を教官に提出し受理されるというケースが19科目ある。よって、ケースによっては優先受講票を教官に提出する者の数がその授業科目の適正人数よりも少ない場合がある可能性もあり、優先受講票を交付されなくてもあきらめずに、まず普通の受講票を教官に提出することもできる旨の広報も必要ではないか。(ただし、そのような学生が多数殺到すると抽選等で履修登録できないこともありうることも明示する必要がある。)

(Ⅲ)優先受講票制度の評価

設問2 優先受講票という制度についてどのように評価しますか。

(1) 優先受講票制度は今後も継続すべきですか

1. 今後も継続すべき制度である
2. 特に必要ではない
3. やめた方がよい

「1. 今後も継続すべき制度である」というこの制度を支持する人が回答者全体に対する割合で

93.5%もいた。優先受講票制度は本年度で2年目であり、入学時からこの制度の既得権を利用できる、つまり自分たちにとっては既得権であり、今後この制度がなくなっても直接的な被害を被る恐れがないにもかかわらずの評価である。過去に優先受講票制度の恩恵を受けず自由競争の中での履修登録を経験した人は、今回初めてこの制度を利用してどのような評価をするのか。それはさておき、学部全体として9割を超す支持率は今後のこの制度維持の強力な援護射撃となろう。しかし、ここであえて指摘するならば医学部医学科では「1. 今後も継続すべき制度である」が63.6%であり学部学科別でみるともっとも割合が低い結果となった。それも、医学部医学科を除いた他の全ての学部学科ごとの割合が9割を超えていることからみれば、異色である。

ここで医学部医学科の教養的科目の履修要件を紹介する。『2001年度教養的科目履修案内・授業時間割表』P36によると医学部医学科の教養的科目の履修要件は合計40単位修得が必要である。そして基礎科目は各科目の指定があり最低16単位以上修得することが必修となっている。薬学部を除いた他の学部学科は教養的科目又は専門科目から自由に選択できる自由選択枠というルールがあるが、医学部医学科と薬学部は自由選択枠がない。つまり、自由選択枠がなく、しかも40単位から基礎科目16単位を引いた24単位を1年でほぼ修得することが強く望まれるのである。それは2年時から開始される医学部の専門科目は、全科目必修という他学部学科にはないカリキュラムおよび履修要件のためである。したがって、本来ならば優先受講票制度を支持する可能性の多い学生が存在するものであると推測された。ここで、設問1(1)を見直すと医学部医学科は優先受講票申請では3科目申請をした学生は20人いて、2科目申請は1人、0科目申請つまりまったく申請しなかった学生は1人いたことになる。設問1(2)ではそして申請の結果交付された者は同学部学科では申請分全てが交付されたものが7人、1科目交付されなかったものが11人、2科目交付されなかったものが3人、無回答が1人いることがわかる。つまり22人のうち21人が優先受講票交付願を提出したにもかかわらず少なくとも14人が非交付科目があったということである。自分の希望が全て叶わなかった学生数は14人、自分の希望が全て叶った学生が7人という結果になっていたのである。結果的に不満を持つものが満足しているものの2倍いるということである。そのことから制度の恩恵を受けることが

できなかった不満として、「1. 今後も継続すべき制度である」が63.6%という他学部学科にない低い支持率と「2. 特に必要ない」が31.8%という高い不支持率としてあらわれた要因のひとつではないかと推測される。

(2) (1)で1と答えた人にお尋ねします。申請できる科目数は今後どうすべきですか。

1. 今後申請できる科目数を増やすべきである

2. 3科目でちょうどよい

3. 今後申請できる科目数を減らすべきである。

「1. 今後申請できる科目数を増やすべきである」と回答した学生は回答者全体の60.5%を占めていた。「2. 3科目でちょうどよい」という割合も回答者全体で38.3%であった。「3. 今後申請できる科目数を減らすべきである」と回答した学生は回答者全体の僅か1.3%であり、申請できる科目数は現状維持か、科目数増加希望者が圧倒的多数である。今後は、現状の3科目以上の科目数を申請科目数にすることが事務システム上可能か否かの検討にはいっても良い環境になったといえよう。なお、付け加えておくと医学部医学科では、科目増要求率が20.0%、現状の3科目維持を支持している割合が80.0%もあるが、設問2(1)でも記述したように現状の3科目より多くの申請が可能になっても、今回のように交付が自分の希望通りなるとは限らないという不満とあきらかめの発想が要因のひとつではないだろうか。

(Ⅳ)履修登録(教養的科目)授業科目数、履修希望していたにも関わらず履修登録できなかった授業科目数・具体的授業科目名及びその理由

設問3 いくつかの授業科目(教養的科目のみ)を履修カードにマーク記入しましたか。

教養的科目の履修登録状況は未記入43人を除いた642人から履修登録した科目数の回答があり、回答者全体に対する%がもっとも多かったのが、14科目の履修登録で318人、49.5%であり、13科目履修登録135人、21.0%、12科目履修登録102人、15.9%と続く。12、13、14科目履修が回答者全体に対する%としては実に86.4%を占める結果となった。ちなみに、履修登録した総科目数から、未記入者を除いた回答者数で割った全体の履修登録科目の1人平均は13.2科目であった。学部・学科別の履修登録科目の1人平均は12.5から13.8の幅に入っており、ばらつきはなかった。なお、教養的科目の履修単位数制限について1年前期は24単位以下に制限されている。このことを考慮すれば、1人平均13.2科目とい

う数字は言語科目 A・B は各学部学科とも同一言語による A 4 単位を含めて言語科目 A・B で 8 単位を単位修得することが要件となっており、1 年前期に 8 単位の半分の 4 単位を履修する計画を立てる学生が少なからず存在すると仮定する。すると、言語科目を 4 科目 4 単位から回答者全体に対する%がもっとも多かった 14 科目 318 人、49.5%の履修登録で計算してみると、14 科目引く言語科目 4 科目は、10 科目であり、1 科目 2 単位（1 単位科目は 1 部のテーマ別科目・一部の一般科目・言語科目 A・B・基礎科目（物理学実験、化学実験）である）を履修すると 10 科目 20 単位となり、合計 14 科目 24 単位と 1 年前期の教養的科目の履修単位数制限である 24 単位を履修できることになる。12・13 科目を履修した学生は上記の言語科目 A・B 4 科目 4 単位以外の 1 科目 1 単位科目を履修したか、時間割の関係で 24 単位まで履修登録できなかった可能性がある。いずれにしても、履修単位数制限いっぱいかそれに近い履修登録をした学生が回答者全体に対する%として 86.4%占めることもあり、教養的科目については履修できるものはなるべく多く履修しようとする傾向が見られる。

設問 4 履修希望していたのに履修カードにマークできなかった授業科目はいくつありましたか。

履修を希望していたにもかかわらず履修カードにマークできなかった授業科目は、未記入 48 人を除いた 637 人からその授業科目数の回答があり、回答者全体に対する%がもっとも多かったのが、1 科目 159 人・25.0%であり、2 科目 149 人・23.4%、0 科目 134 人・21.0%、3 科目 99 人・15.5%と続く。0・1・2・3 科目が回答者全体に対する%としては実に 84.9%も占める結果となった。ちなみに、履修希望していたのに履修カードにマークできなかった授業科目総数登録から、未記入者を除いた回答者数で割った全体の履修登録科目の 1 人平均は 1.9 科目であった。昨年度の同じ質問では 1 人平均 2.0 科目であった。設問 2（2）では「1. 今後申請できる科目数を増やすべきである」と回答した学生は回答者全体の 60.5%を占めていたこともあり、今後の改善では設問 4 も考慮に入れて、優先受講票の交付科目数は現行の 3 科目に最低 2 科目をプラスした 5 科目プラスアルファで行う必要性がこのアンケート項目から希望されている。

設問 5 希望どおりに履修カードにマークできなかった授業科目について、具体的な授業科目名を、理由別に教えて下さい。

(1) 抽選で落とされた。

履修を希望していたにもかかわらず抽選で落とされ履修カードにマークできなかった授業科目は、未記入者なしの 685 人が回答という結果のもと授業科目数の回答があり、回答者全体に対する%がもっとも多かったのが、0 科目が 213 人・31.1%であり、1 科目 199 人・29.1%、2 科目 153 人・22.3%、3 科目 75 人・10.9%と続く。0・1・2・3 科目が回答者全体に対する%としては実に 93.4%も占める結果となった。ちなみに、履修希望していたのに抽選に落とされ履修カードにマークできなかった授業科目総数から、回答者数で割った抽選漏れのために履修できなかった科目の 1 人平均は 1.8 科目であった。人によっては優先受講票交付に落ち、抽選漏れによって履修登録できない学生もいる可能性がある。なお、この抽選漏れは優先受講票制度の範疇外であるので改善対象からはずれる。

(2) スクリーニングテストなど、抽選以外の受講調整方法で落とされた。

1. スクリーニングテスト 2. じゃんけん 3. その他

受講者数調整の方法をスクリーニングテストとする授業科目に対して、優先受講票制度においては、学生から優先受講票の交付申請がなされた場合は、優先受講票を交付するが、その有効性は保証せずこれを認めるか否かは各教官の判断に一任させている現状がある。よって優先受講票交付を受けてスクリーニングテストを受け落とされた者が学部学科合計 8 人の中に何人存在したかこの表ではわからない。また、じゃんけんでは 16 人が落とされた。その他では 12 人が落とされその内訳は早い者順がもっとも多く 7 人（文学部 1 人・工学部 6 人）、学期開始第 1 週目の科目ガイダンスの後半に行ったら受講者が埋まっていたというのが 2 人（文学部 1 人・工学部 1 人）、あみだくじが 1 人（法学部 1 人）、シラバスには限定の記載がなかったにもかかわらず当日「文系の学生は無理」と言われた学生が 1 人（教育学部 1 人）、優先受講表提出者がその科目の適正人数に達してしまい受講できなかった学生が 1 人（医学部医学科）であった。なお、この医学部医学科の学生は「定員に達しているならばじめからそう言ってほしい。」とコメントしている。なお、このことについては『教養的科目の履修手続の変更（優先受講票交付再度の導入）について（在学者用資料）』で以下のようにコメントしているので問題はなからう。

「優先受講票」交付段階での受講者調整の結果、

抽選漏れした場合は、当初立案した履修希望時間割表を、当然修正しなくてはなりません。また、「優先受講票」が交付されるのは3科目だけですので、普通の受講票を提出する授業科目もまだ多く残っています。こうした残りの授業科目履修を決定する上での参考資料として、どの授業科目にどの程度「優先受講票」が交付されているかを一覧にした「科目別優先受講票交付者数リスト」を、交付開始日に総合教室棟学生係横のエントランスホールに掲示します。このリストで、「優先受講票」交付者数とその授業科目の適正人数よりも多かった場合、普通の受講票を教官が受理しないこともありますので、その点を念頭に入れて科目ガイダンスへの出席を考えてください。」

(3) 教室に行ったらあまりに履修希望者が多くて入りきれないので、受講票の提出をあきらめた。

履修を希望していたにもかかわらず教室に行ったらあまりに履修希望者が多くて入りきれないので、受講票の提出をあきらめた授業科目は、未記入者なし685人からその授業科目数の回答があり、回答者全体に対する%がもっとも多かったのが、0科目593人・86.6%であり、1科目78人・11.4%、2科目12人・1.8%、3科目2人・0.3%という結果になった。0.1科目が回答者全体に対する%としては実に98.0%も占める結果となった。ちなみに、履修希望していたのにこの理由により受講票の提出をあきらめた授業科目総数から、回答者数で割った科目の1人平均は0.16科目であった

逆にいうと教室が混んでいたために受講票提出をあきらめた人数は92人となり、回答者全体に対する%では13.4%がこの理由のため受講をあきらめていることがわかる。これはある時限のある授業科目に受講希望者が殺到するため起こる現象と考えられる。授業時間割作成時には科目調整等である科目に受講者が集中しないようには工夫しているものである。にもかかわらずこのような現象が発生するのには非常勤教官の授業希望時間帯は原則動かせないといった問題（本務校との兼ね合い）や専任教官にも授業希望時間帯があり、優先順位をどのように調整するのが今後の課題となろう。

(4) 上記以外の理由で受講票の提出をあきらめた。

1. 優先受講票で満員だった
2. 同一時間帯に他の希望する科目があった
3. 24単位という上限を超えるので
4. 同一時間帯に専門あるいは必修科目があった
5. その他

このデータでは、「1. 優先受講票で満員だった」が学部・学科全体で120人ともっとも多く、「2. 同一時間帯に他の希望する科目があった」が学部・学科全体で97人、「3. 24単位という上限を超えるので」が49人、「4. 同一時間帯に専門あるいは必修科目があった」が57人、「5. その他」が39人という結果となった。

「5. その他」の内訳は「5限目を履修したくなかった」が6人（文学部1人・法学部4人・経済学部1人）ともっとも多く、「後期に実験があるため」という理由が4人（薬学部4人）、「教室移動が困難と判断した」が3人（文学部1人・工学部2人）、「休講のため受講票を提出できなかった」が3人（教育学部3人）、「自分が適当だと思えるコマ数を超えていたから」が3人（文学部3人）、「対象者による制限（男子限定・3, 4年限定）のため」という理由が2名（文学部2名）、「優先受講票提出者でほぼ定数が満たされていたため」が3名（医学部保健学科1名・薬学部2名）、「後期に履修したい科目があるため（必修科目・専門科目）」が2人（理学部1人・薬学部1人）、「遅刻のため授業に出席できなかった」が2人（法学部1人・工学部1人）、「履修が可能であるという確実性を重視したため受講票提出をあきらめ他の科目に受講票を提出した」が2人（文学部1人・薬学部1人）、「初級すぎたので」が1人（工学部）、「授業が難しすぎた」が1人（文学部）、「前半が終わっても講義を続け、席があるにもかかわらず、受け入れ可能者数を表示しなかった」が1人（文学部）、「教材（自転車等）の購入負担のため」が1人（文学部）、「授業の雰囲気合わなかったため」が1人（文学部）、「同じ科目名の授業が別の時間帯で開講しておりそちらを受講したため」が1人（医学部医学科）、「授業で行われる運動競技（ソフトテニス）を以前経験していたため」が1名（工学部）、「早い者勝ちで受講票提出をあきらめた」が1名（工学部）であった。

この分類から問題なものは以下の3点である。1つは文学部学生の指摘である「前半が終わっても講義を続け、席があるにもかかわらず、受け入れ可能者数を表示しなかった」というクレームである。『教養的科目の履修手続の変更（優先受講票交付制度の導入）について（教官用資料）』の中で以下の記述がある。

「授業担当者の方は、科目ガイダンス前半で受講希望者が適正人数を超えて抽選をするような場合、「優先受講票」提出者を抽選の対象外として優先的

に受講許可を出し、残りの普通の受講票を提出した者についてのみ抽選を行うようにしてください。また、科目ガイダンス後半で抽選が必要になった場合は、「優先受講票」は使用できませんので、科目ガイダンスの後半に「優先受講票」を提出した学生には、普通の受講票を提出させ、他の学生と平等に抽選してください。」

科目ガイダンス時には前半の終わりと後半始めにチャイムが鳴ることになっており、学生の言い分では教官は本来科目ガイダンス前半で優先受講票を学生に提出させ、優先受講票が適正人数を満たしておればこれ以上の受講者の受け入れは困難である旨を学生に伝える必要があり、仮に、受け入れ可能者数が満たされていない場合は受け入れ可能者数を明示し、抽選等の方法で適正人数まで受講者をうけいれる必要がある。しかしながらこの教官はこの措置を行わなかったということである。学生にも教官にその旨の意思表示をしてほしかったが、教官にも優先受講票制度の理解不足は否めない。『教養的科目の履修手続の変更（優先受講票交付制度の導入）について（教官用資料）』を教官に配布していることやこの制度が実施されて2年目を迎えていることもあり、今後はこの制度の理解徹底も必要であるが、学生が苦情を訴えてきた時の苦情処理機関の設置も視野に入れる必要があろう。

2つめは「休講のため受講票を提出できなかった」という理由が3人存在したということである。科目ガイダンス時に偶然休講となる可能性は想定される事態であり、この講義を受けた学生はこの3名以外でも存在したであろう。事務に状況説明をし、適切な措置をするよう指示された学生は受講できたであろうが、この3人は受講票提出をあきらめたのである。今後の課題としては、科目ガイダンス時に休講となった科目の履修方法についての掲示での指示を徹底する必要がある。この3人の学生についても自分で判断せず、事務に行って指示を受けるといったこともしてほしかった。

3つめは、建物の配置による物理的条件のため教室移動が困難と判断した理由で4人（文学部2人・工学部2人）の学生が受講票の提出をあきらめたということである。工学部の学生は専門科目の講義が小立野の校舎で行われているので物理的に移動は困難である。また、文学部の学生の理由は教養的科目の一つ前の授業が理学部校舎であり10分の休み時間の間での移動の困難さを認識したためあきらめたものである。いずれも校舎間の移動時間の問題であり、

休み時間の延長や遠隔授業を考慮に入れる必要性があろう。

（V）履修登録についての自由回答

問6 履修登録について、ご意見や具体的な改善策などがあれば、下記の欄にご記入ください。

この設問には237人の回答（1人の回答の中には複数意見有）があった。分類した主な内容は以下のとおりである。（一部省略）

○教官が優先受講票制度を理解していない（24）

（法学部）「優先受講票の制度をいまいち理解していない教官がいたのには驚いた。きちんとしたマニュアルなどを教官に手渡ししているのだろうか？」／

（経済学部）「優先受講票の使い方もわからないような教官がいたことには幻滅した。」／（教育学部）「前半、後半にきちんと分けてガイダンスをしてくれない教官がいたので、その時間、他の受けてみたかった講義に行けなかった。」／（理学部）「抽選方法、ガイダンスの前半、後半の動きなどよく理解していない教官がおられるため抽選が不公平なかたちで行われているところがあるようです。」／（医学部保健学科）「教官が履修登録について良く理解されていない授業があり、何の説明（抽選）もないまま講義が続けられた。後半に別の講義のガイダンスに出席することもできず、かなり困りました。できるならガイダンスに出られる教官にも、ガイダンス中にやるべきこと、登録の仕方や受講票のゆくえなどをきちんと理解しておいてほしいです。」／（医学部保健学科）「受講時、優先順位があるのに、それがあまりみとめられていないのはどうしてですか？」／（医学部保健学科）「科目ガイダンスで受講票を提出するときに、ほとんどの先生はちゃんと、抽選をして決めてくださったので、納得することができました。でも、中には受講票の受けとり方を全然知らない先生もいらっしゃり、本当にその授業を取ることができているのか、心配です。またシラバスに“1年理系優先”とあったのに、2年以上や、文系の生徒の受講票といっしょに抽選をされた先生もいらっしゃり、その結果抽選にはずれてしまった1年理系の生徒は、きっと納得がいかないと思いました。だから先生方にはぜひ、きちんとした方法で抽選していただきたいです。」／（医学部保健学科）「今年から教養的科目の必要単位数が変わったのに、それを知らない教官がいて、危うく基礎科目を履修できなくなるところでした。（教室が大きかったのが幸いでした）また、

科目ガイダンスの前後半システムをわかっていない教官もいて、後半のガイダンスに出席できなかった人、遅刻した人もいるようでした。」／（薬学部）「ある科目のガイダンスのいったら、人数オーバーで抽選することになった。1年理系学部優先とかいてあったから、それを期待していたのになぜか無視された。関係ないなら、最初から、1年理系学部優先とかかないでほしい。薬学部のけっこうたくさんの人が抽選もれして、おちた人はみんな怒っていた。」／（工学部）「教官にも優先受講票のしくみをもっとしっかり理解させておくべき。（限定）や（優先）などの条件が守られていない所があった。」

○自由に履修したい科目をとりたい（20）

（文学部）「自由に履修したい授業を選べるなんて、名ばかりだと思った。」／（文学部）「やりたい授業をとりたい。授業のアンケートをとってから教室を決めたらいいと思う。」／（法学部）「受けたいのとらせてください。まずあらかじめ希望人数をとっておく。多いところは週に何回も開く。先生がんばれ。」／（経済学部）「このままだと、自分のとりたい授業の半分もとれません。もうちょっと考えてほしい。」／（教育学部）「義務教育なわけではないのだから、自分の好きな勉強をしたい。自分は抽選に7回も落ち、しかたなく第一希望ではないもので授業をうめたが、これは、自分のためになっていない！！こんなことで「単位を取れ」と言うのは、はっきり言って最悪である。」／（教育学部）「策は思いつかないが、もう少しみんなが希望通りとれるようにすべきだ。そうじゃないと運の悪い人は、空き時間だらけになるし、自分の学びたいことを学ぶという大学の主旨からもずれてしまうと思う。」／（医学部保健学科）「私は大丈夫であったが友人で自分のとりたい授業を抽選でおとされてとれなかった人がいた。自分の受けたい講義がうけれないというのは残念なことである。」／（医学部保健学科）「もう少しこの履修登録の制度を改善してほしい。この制度だととりたい科目を1つも取れない人も出てくる場合も考えられるし、とりたい科目もとりにくい。」／（薬学部）「あらかじめ人数を制限し、定員がオーバーしたら、うけたい人もうけられない、門前払いするような履修の方法は、あまりにも生徒をないがしろにした、きわめて大学側の都合、さらには、先生方の都合による方法としか言えない。これでは、本気で勉強しようとして大学へ入ってきた生徒の心を失つさせます。大学側は、今やレジャーランド化しつつある大学をそして生徒を心配しているようですが、その前に、

やる気のある生徒の心を落させるような履修方法を改善すべきではないでしょうか。」／（薬学部）「抽選でもれてしまうとそのあとの時間割りも変更しなければならなくなってくるので、自分のとりたいもののうち実際にとれたものが少なくなってしまうこともあるのでその辺がうまくできるようにしてほしい。できれば希望したものは全てとれるようになればいいです。」／（工学部）「履修登録はほとんど抽選なので、運の悪い自分は1つも抽選で当たらなかった。自分の受けたくない授業でも、卒業するためには嫌々取らなければならないので大変不満、授業への意欲が無くなった。自分が進んでやりたいという授業が受けられないというのはどういうことかと思う。父の大学では、最初に希望者を集め、人数に応じて教室を決めていたそうです。希望者が多ければそこに教官や教室をまわせばいい。」／（工学部）「とりたい授業がとれないのはよくない。多くの授業に受講票を出して、カード提出時に取り消す人がいるので、多くの人に迷惑がかかる。」

○教養的科目説明会時の内容・配布資料がわかりにくい・説明会の時期が早い（17）

（文学部）「最初のガイダンス時の説明がとても分かりにくかった。どうせならば実際登録手続きをしたことのある上級生が説明をした方が、わかりやすくてよいと思う。」／（文学部）「優先受講票を得るために入学前からもらって読みましたが、文字ばかりが多くてわかりにくいです。何回もくり返し読んで、やっと出せました。もっと箇条書きや表にまとめるなど、1年生にもわかりやすいものにしてほしい。（読んでもわからなかったから出せなかったという友達が数人いました。）」／（経済学部）「ガイダンスのときの説明がわかりにくくて、結局どうすればいいのかよくわからなかった。」／（経済学部）「優先受講票の提出日の前に教養的科目のオリエンテーションをしてほしかった。1年生は意味も分からないまま出せと言われ、後で失敗したなあと思ってどうしようもなかった。」／（教育学部）「優先受講票について事前に説明を聞いたけど、上手く使うことができなかったの、来年の1年生には、もっと分かり易く、説明してあげられればいい。」／（教育学部）「希望しても取れない科目が多すぎる。もっと競争が緩やかになるような制度を考えてほしい。（ある大学では、希望する科目がほとんど競争なしで取れるらしい。）」／（理学部）「履修登録は、少し難しいと思う。話を聞いただけでは、全てを理解できないかもしれない。僕は実際にやってみて分かった。」／（医

学部保健学科)「1年生に対しては、単位の説明、どのように講義をとるべきか、という詳しい説明を優先受講票交付願を提出する前にするべきであると思う。よくわからないまま講義の計画表を立てても、優先受講票が上手に利用できなくなると思う。入学してからオリエンテーションではなく、もっと早いうちに詳しい説明をしてほしかった。」／(医学部保健学科)「入学前に優先受講票の事についてもっとある人の例とかサンプルみたいなものを使ったりしてくわしく説明してほしかった。」／(工学部)「優先受講票の書き方(選び方)が良く分からなかった。4月に入ってから説明会をひらいてほしい。」／(工学部)「学部ガイダンスで例が提示されてはじめて時間割を組むことができたので、もっと早く例えば、履修案内と各学科の例を同封してほしかった。そうしたらもっとわかりやすくなる。」

○ 優先受講票交付願の提出時期が早すぎる (13)

(文学部)「優先受講票交付願の提出が入学前というのはいただけない。使い方がよくわからない(どの科目に使うべきなのかとか)まま提出という形なので。」／(教育学部)「入学前に時間割の計画をさせるのはおかしいとおもう。第一、授業ガイダンスもない時にシラバスのみで決められるわけがないし、複雑すぎてわけがわからなくなる。(他大学の友人に金大の履修登録の話をする、みんなきまって奇妙な顔をする。)」／(理学部)「優先受講票を出す時期が早い(授業の内容がよく分からないのに提出しなくてはならない)授業の内容をシラバスに書いてあることだけで判断し、受講することになるのもっと受講票提出を遅くしてほしい。」／(医学部保健学科)「優先受講票は何物であるかを理解するのにかなりの時間を要した。(追加合格だったので)説明もなく、締め切り期限までの時間が少なく理解した頃には既に郵送では間にあわなかったのでは出すに出せなかった。せめて手続のときに一言教えてほしかったです。」／(薬学部)「入学手続きをしたその日に優先受講票説明会があるのはおかしい。ちゃんと説明会に出席できるように知らせておいてほしい。」／(工学部)「履修ガイダンスを十分にやる前に優先受講票の締め切りがあると、後々いろいろな問題が生じ、優先受講票が無駄になる可能性が高い感じがします。もし、この期日を締め切りとしてやっていくなら、締め切り前に強制的にでも説明会を開くか、何とかするべきだと思います。」／(工学部)「1年前期は詳しい授業内容が分からないうちに優先受講票の提出期限がきてしまったため1つもだせなかった。1

年前期のみ優先受講票の期限を遅らせるか廃止した方がいいと思う。」／(工学部)「優先受講票を提出するのを入学した後にしてほしい。友達や先輩からの話などをいろいろ聞きたいから。」

○ 抽選のやり方は統一すべき (12)

(法学部)「抽選のやり方は統一すべきだと思う。私が受講しようとした科目の教官は、受講希望者が定員80名のところ140名ほど殺到したというのに、「あみだくじ」で抽選を行った。非常に効率が悪く、後半の受講申し込みに行く時間もなかった。多くの学生が、どうすればいいのか、ややパニック状態に陥っていた。」／(教育学部)「「じゃんけん」は負けてもなかなか納得がいけないので、面倒でも抽選にしてほしいです。」／(理学部)「抽選のときの名前(番号)が聞き取りにくいので聞き取りやすくして下さい。抽選のとき、効率が少し悪いのではないかと思います。」／(医学部保健学科)「履修希望者が多く、抽選で行われたが、漏れたのが、教室の前方に座っている人ばかりで、いまいち納得できなかった。」／(工学部)「抽選で落ちるならまだしも、じゃんけんやその場の思いつきで落とすのはやめて欲しい。」／(工学部)「調整方法を全てスクーリングテストにすればいい。」／(工学部)「教官によって抽選方法がばらばらである。ちゃんと統一してほしい。」／(工学部)「ある科目の抽選はとても抽選とよべるものではなく、ただ前から数枚集めてというあまりにも不平等なものであった。今後、こういう抽選はさけるようにしてほしいと思う。」／(工学部)授業に「～優先」などの制限があつて抽選になるときは、受講者が適当かどうか、厳密に審査してほしい。」

○ 優先受講票の交付枚数をふやしてほしい (11)

(経済学部)「優先受講票を出した人が多くて、優先受講票の抽選からもれた人には、他の授業での優先受講票をもらえるようにしないと不公平だと思う。1人3枚の優先受講票をもらえるようにするべきだと思う。」／(経済学部)「優先受講票の数を5科目にしてほしい。言語科目で3科目使ってしまうので、テーマ別、一般でやりたいことが優先にならず、おとされたので。」／(理学部)「みんな、優先受講票をもらえるようにしてほしい。」／(理学部)「優先受講票を出せる数が3つというのは少ないと思う。せめて5つにしてほしい。」／(医学部保健学科)「優先は3科目までなのですが、せめて4科目(言語の単位数)あればと思います。欲を言えば、今の時代なくてはならない情報Aをとるためにも+1科目あればと思うけれど、そうしたら優先の意味なくなる

な...。」／（薬学部）「薬学部は必修が多いので、好きな授業がなかなかとれない。優先受講票の交付数をふやしてほしい。」／（工学部）「まず優先受講票の登録科目数をふやしてほしい。3つは中途はんぱだ。4つあればいろいろと大変な言語だけでも全てとれるし、人気のあるところへ優先を出すわけだから交付されない可能性もある。そういった面から考えても不足している。5つ、6つくらい欲しい。」

○優先受講票交付願提出前に専門科目の時間割・シラバスがほしい（9）

（経済学部）「学部別のシラバスをもっとはやく渡ししてほしい。」／（経済学部）「専門科目の必修の時間を、経済の1年生は科目ガイダンスの前日にしられたので、皆また、計画を立てなおさなければならなかった。しかも、その必修の時間に優先受講票をとった人もいた。」／（経済学部）「経済学部には卒業要件に教養の経済学Ⅰ～Ⅳの授業から4単位とるというのがあります。なので、授業を受けようと思っていたのですが、2つとも抽選で落とされてしまいました。他の授業と違って必修のもので落とされるのはとてもキツイと思います。それに、この教科が必修とわかったのは専門科目用のシラバスが配布された後なので、優先受講票も使えません。これはかなりの問題だと思います。」／（教育学部）「学部オリエンテーションは優先受講票交付日より前にすべきだ。自分の場合、専門の選択必修の授業と優先受講票を交付された授業が同一時限になってしまったため、専門の方を無視せざるを得なかった。これは優先受講票交付願提出時に専門科目については説明不足だったからだと思う。」／（教育学部）「専門の必修科目についてもっと早くから詳しく教えてほしかった。」

○抽選はしないでほしい（9）

（法学部）「抽選や優先受講票といったものではなく、スクリーニングテストなどで実力をはかった上で受講者を調整してほしい。」／（教育学部）「本当に学びたいと思っている人と、その時間をうめたいから希望している人とかが平等に抽選で選ばれるというのも、なんだかイヤだ。」／（教育学部）「抽選をすると、本当に授業を受けたいと思っている人が受けられなくなってしまうこともあるので、教室に余裕があるならば、出席をとる時や、テストの時や、プリントを配るときは大変かもしれませんが、なるべく抽選をしないでほしいと思いました。」／（教育学部）「時間割をたてる前からとりたいと思っていた科目があって、何とかその科目をとれるように時間割

を組んだのに抽選で落とされたりしたのが悔しかった。単位をとるために来た人と区別はできないのだろうか。どうも理不尽な気がしてならない。」／（教育学部）「とりたい授業があるのに抽選などで落とされるのはひどすぎる。この制度はやめるべきだ。」／

（工学部）「誰でも受けたい科目を受けられる様に、抽選やスクリーニングテストを廃止してほしい。」

○定員を超えていても、教室に入る程度ならできるだけ多くとってほしい（8）

（文学部）「定員をきっちりとする教授と、定員の倍以上の生徒数を受け入れる教授がいるので、定員を気にしない教授を予め公表してもらいたい。」／（文学部）「希望者が全員座れているのなら、なるべく抽選して人数を減らさないでほしい。」／（教育学部）

「定員を超えていても、教室に入る程度なら、できるだけ多くとってほしい。（特に、スポーツは定員がほとんど超えるので）」／（理学部）「受講希望者を聞き人数を調べた上、その人数に見合う教室で授業をやってほしい。」／（工学部）「優先受講票の他に、その時同時に予備調査という形で全ての履修科目の希望を考え、そこで定員を決定して欲しいです。言語科目や対話型科目ではそのような事は不可能かもしれないけれど、講義中心のものであれば、人気の多い科目を大教室に移したりもできるのではないのでしょうか？とにかく学生が聞きたい、受けたい授業が受けれるようになる事をお願いします。」

○言語科目は学部別・クラス別にとれるようにしてほしい（6）

（医学部保健学科）「言語はクラス別にするかとかしてあまり悩まなくていいようにしてほしい。抽選で落とされたときはものすごくショックです。ずっとそのことばかり考えてしまいます。とにかくとつてもつらいです。」／（薬学部）「私は、薬学科に所属しているため、後期の実験と専門の授業が月曜5限、水曜3～5限、木曜5限、金曜3～5限というように入ってしまった。そのため言語科目を選択する時間は、ほとんど限られてしまい、ドイツ語は、A1、A2とも抽選ではずれ、とれなくなっていました。どう考えても薬学部と他学部の生徒が同じ方法で授業選択をするのは、おかしいと思います。薬学部の場合は、せめて言語科目Aだけでも、授業の時間帯を設定し、ドイツ語必修として、薬学部の人だけでうけられるような授業をつくるべきです。」／

（薬学部）「医・薬は、将来ドイツ語を必要とするため、医・薬限定のドイツ語の授業枠を設けるべき。」

○優先受講票の出願状況を掲示する場所を増やすか・

ひとりずつにコピーしてほしい（４）

（教育学部）「優先受講票が入っている人数を、インターネットで開示してくれると便利です。」／（医学部保健学科）「優先受講票の出願状況の紙を掲示する場所を増やすか、ひとりずつにコピーしてほしい。見るのに大変苦労した。」／（工学部）「優先受講票ですでにきまっている人数を掲示していたが、何千人もいるのに、たった２ヶ所しかなかったので、１時間も順番待ちをせざるを得なかった。もっと掲示場所を増やすか、学部オリエンテーションのときに口頭で伝えろとか、プリントを配るとかするべきである。」

○優先受講票を提出したが、教官のアクシデントで講義ができなくなった（３）

（法学部）「優先受講票を出したのに、教官の理由で講義がなくなったときの対処法を考えてほしい。」／（教育学部）「教官の急病によって授業がなくなった時は、優先受講票を他の授業でも使える様にしたい。」

以上は学生の自由記述を分類したものである。１人で複数項目にわたる記述はそれぞれ分類項目ごとに分けて記した。現在の履修制度全般にわたる学生の感想、具体的な改善策が寄せられていた。この自由記述を通して感じたことは、例えば自分は抽選に２科目落ちたが他の人がそれ以上抽選漏れをして、履修計画が大幅に狂ったといった他人を思いやる気持ちや、今回の履修登録は終わったことなのでどうにもならないが、後輩のために何とか履修希望科目を当たり前のように抽選なしで履修できるように制度の改善を求めていることが印象的であった。自己中心的な学生が多いと巷で喧伝されている昨今、他人や来年度入学してくるだろうまだ見ぬ後輩に対しておもしろい心を持っている学生が存在することに、純粋に驚きを感じるとともに、何とかして大多数の学生が履修希望する科目を何のストレスも感じず、受講できる制度を早急に構築していく必要性を強く感じた。なお、この自由記述をした学生には以下の意見があると要約できよう。

まず、教官が優先受講票制度を理解していないため、不利益を被ったという憤りが見受けられる。また、大学に入学したら自由に自分の興味のある科目を履修しようという意欲があるにもかかわらず、現実には科目ごとに適正人数があるため希望科目が履修できないという矛盾を感じ、不満を抱いている。大学入学前の入学手続き時に、大学の履修制度を理

解出来ていないにもかかわらず、その時期に優先受講票制度を中心とした教養的科目説明会が行われ、その説明内容及び配布資料がわかりにくいという不満も見受けられる。

そのうえ、『履修案内・授業時間割表』『シラバス』を渡され全く講義に出席できない早い時期にもかかわらず、優先受講票制度を利用し優先受講票の交付願を提出するという不可思議さに対する疑問がある。科目ガイダンスが始まり受講希望の講義を履修するために優先受講票が運悪く交付されず、かつ適正人数を超えた科目に対して抽選を行う科目があるが、その際の抽選方法は教官によって方法がばらばらであり、とても抽選と呼べないような方法があるという不満・不公平感に対する憤りが見受けられる。現在の優先受講票制度では１人最高３枚交付されることになっているが、交付枚数を増やしてほしいという要望がある。また、教養的科目に関する情報は『履修案内・授業時間割表』『シラバス・教養的科目編』が入学手続き時に配布されるが、専門科目の時間割およびシラバスが同時には配布されず、優先受講票交付願を提出後、専門科目との重複が学部オリエンテーションでの説明及び専門科目の時間割表の配布によって初めて分るといった事態が発生する。このことにより、せっかく優先受講票を交付されても履修したい（履修しなければならない）専門科目と重複し、泣く泣く専門科目を履修し、優先受講票を１枚無駄にするという不利益を被っているという事実と不満がある。

自由に履修したい科目をとりたいと関連があるが、履修希望の科目が適正人数のため抽選で落とされ履修できないことがあり、本当にその科目を履修したい人が時間割を埋めるために本来履修を希望しなかった人がたまたま抽選の運が良かったので履修できるのは不公平であるという不満がある。よって、抽選はせず、履修希望者を全て受け入れてほしいという願望がある。

抽選に関連して、本来抽選を行うのはその科目の適正人数であり、言語科目や情報処理演習のような教育上の問題やコンピュータ機器の台数による適正人数は教室変更にはなじまないもので抽選はやむを得ないが、一般の講義式授業形態では定員を超えていても、抽選はせず教室に入る程度ならできるだけ多く履修者登録をさせてほしいという願望がある。履修希望者が多ければ、より収容人数が大きい教室に変更するべきであるというもっともな改善策もあった。学部・学科によっては１年次から専門科目の実

験実習があり、その専門科目と言語科目の時間帯重複がある。また、学部・学科によっては専門に進むとドイツ語が必要不可欠になるにもかかわらず先ほどの時間帯重複や抽選によって履修できない弊害がある。よって、言語科目は学部別・クラス別にとれるようにしてほしいという希望がある。1991年の大学設置基準の改正により大学側が科目内容を自由に設定し、科目数も大幅に増加することで、それらの科目を学生が自由に履修できることが本来このカリキュラムの特徴のひとつであるが、言語科目については、入学手続き時に言語科目の希望カードに記入してもらい、学部・学科ごとに希望カードに基づいた言語科目クラスを設定してはと考える。そうすれば、少なくとも言語科目をどのように履修すればよいか、抽選漏れが発生した場合の対処など学生の言語科目に対するストレスは緩和されることになる。また、言語科目に使用していた優先受講票交付願3科目分を他の科目に回せることができるというメリットも生じる。

事務的な問題であるが、優先受講票の出願状況を掲示する場所を増やすか・ひとりずつにコピーしてほしいという希望がある。また、金沢大学のホームページに載せると良いのではという意見もあった。優先受講票を教官に提出したにも関わらず、教官のアクシデント（病気等）によってその科目が履修登録できなくなり他の科目を履修したい。しかし、優先登録票交付願提出期間は過ぎており、他科目の優先受講票は交付してもらえない。さらに、科目ガイダンスが終了しており他の科目登録はどの科目も適正人数がほぼ満たされており受講票を受け取ってくれる教官が少ない。何とか他の科目を履修できる救済策はないかという内容である。このケースはまれな事例であるが、今後も発生しないとも限らない。また、該当学生の落ち度でもなく、教官の理由による開講取りやめは、大学側に学生不利益救済の義務が生じる。私案としては、集中講義科目に追加登録するという手立てがあるように考える。

学生より以下の記述があった。「**集中講義の受講票受理者発表をもっとはやくしてほしい**（今回だと4月16日頃に）」集中講義履修登録についての不満である。

2001年度前期集中講義3科目の受講票提出期間は4月11日～17日となっていた。そして、集中講義の受講票受理者発表は4月20日であった。科目ガイダンスが4月11日～17日の期間であり、その段階で優先受講票や受講票を提出し、前期の履修計画が希望科目を履修できたかできないかに関わらず個人

確定された時期である。その後、個人確定された履修計画のもとに履修カードを4月18日～24日に期間内に提出し、その後履修許可表確認・訂正期間4月26日～5月1日に確認・訂正し本年度前期履修登録が正式に確定するのである。つまり、4月20日の集中講義受講票受理者発表は遅いのである。この学生の記述は4月16日となっているが、科目ガイダンス期間前の4月10日までに集中講義受講票受理者発表をしないと、集中講義を抽選漏れにより受講できなかった学生は他の科目登録は難しいことになる。集中講義は、原則として他大学の教官が講義するものであり、集中講義当日まで大学に来ることはなく、科目ガイダンスも行われぬ。「シラバス」のみの情報で履修登録する必要がある。集中講義科目は優先受講票制度における交付対象にはならない。集中講義登録こそ、3月の入学手続き直後の「教養的科目に関する説明会」時に登録説明し周知する必要があるのではないか。よって、優先受講票交付願提出期間中に同時に集中講義受講票提出期間を設ける必要性があるのではないか。

最後に、昨年度のアンケートでも指摘された問題であるが、**情報処理演習を履修したいのでもっと演習をふやしてほしい**という要望である。本年度では以下の記述があった。

「情報処理演習Aに優先の交付願を出したが、その時点で落とされたので、この科目ははっきりいって普通の受講票では履修できないも同然。落とされた人数も多いだろう。今の開講数では十分でないと思う。また、文理系問わずコンピュータを使いこなせることは今の時代では必須のことでシラバス等にも書いてあったが、そんなに必要なら必修科目として全員参加とするか、開講数をふやしてほしいと思う。」

2001年度前期情報処理演習の開講コマ数は『金沢大学 Syllabus〔授業計画〕2001 教養的科目編』pp.47～54によると、12コマあり、適正人数は690人である。12コマ中11コマは情報処理演習Aというパソコンを理解するといった基礎的な演習であり、適正人数660人である。もう1コマは情報処理演習Dというパソコン上で実際にプログラミングを作成実行させるといった応用的な演習で適正人数は30人である。ちなみに、本年度後期情報処理演習の開講コマ数は13コマあり適正人数は688人である。13コマ中6コマは情報処理演習Aで、適正人数360人である。情報処理演習Bという主に電子メールを使ったインターネットにおける読み書き能力の向上を目指した演習は1コマ、適正人数40人である。情報処

理演習 C という UNIX ワークステーションを使っての情報処理演習は 1 コマ、適正人数は 48 人である。情報処理演習 D は 4 コマ、適正人数は 240 人である。

つまり、パソコンについての基礎的な演習のコマ数及び収容人数は、本年度前期は 11 コマ・660 人、本年度後期は 6 コマ・360 人が受講可能であることがわかる。また、情報処理演習の対象学生は前期については全て「工学部以外限定・1, 2 年優先」となっており、後期は 2 コマの「工学部以外限定」を除いては「工学部以外限定・1, 2 年優先」が 4 コマある。つまり、1 年間でトータル 1020 人が受講できる可能性があり、しかも本年度 4 月 1 日現在の金沢大学 1 年次生数は 1907 人で、内工学部生は 500 人在籍している。ということは工学部を除いた 1407 人が情報処理演習 A の対象学生となる。1 年次生全員が情報処理の初心者という可能性は少ないであろうし、2 年次以上が履修希望しても、1・2 年次のうちにパソコンの基礎的な操作を習得する情報処理演習 A を履修することは、数字上は不可能な数字ではない。ただし、過去に情報処理演習 A の優先受講票交付願を提出し抽選に漏れた者及び教官に履修票を提出したが適正人数オーバー等の理由で受理してもらえず、履修登録が出来なかった者は次の学期で情報処理演習に限って優先的に優先受講票を交付することにすれば、履修希望者は 1・2 年次の間に履修可能になってくるであろうし、学生の履修に対する精神的ストレスの軽減にもなる。

(VI)『シラバス』『履修案内・授業時間割表』についての自由回答

設問 7 『シラバス』『履修案内・授業時間割表』などでわかりにくい点がありましたら、それについてのご意見・改善提案などを、下記の欄にお書きください。

この設問には 130 人の回答（1 人の回答の中には複数意見有）があった。主な内容は以下のとおり。（一部省略）

○『履修案内・授業時間割表』の内容がわかりにくい (29)

（文学部）「学部別の卒業要件が少しわかりにくいようです。」／（法学部）「わかりにくい言い回しが多すぎる。」／（法学部）「言語の取り方がわかりにくかった。卒業できる単位数や進級に必要な単位数が、ごちゃごちゃになって混乱した。」／（法学部）「履修カード提出までの説明文がごちゃごちゃ書いてあって大事なところが分からない。もっとすっきりと

見やすく書いてほしい。」／（経済学部）「全体的に履修手続を「よく知っている側」からの説明で初めて読む者には全く理解できない抽象的な内容となっていた。」／（経済学部）「専門科目の開講予定時間帯の説明が不十分すぎます。」／（教育学部）「履修案内をもう少し読みやすいレイアウトにしてほしい。

（例えばゴシック体の文字をもう少し増やすとか。単位の上限についてなど、ゴシック体で書いてあった方が良いと思われる箇所がいくつかあった。）」／

（教育学部）「全体的にすごく分かりにくい。具体的には時間割の例（良い例、ダメな例）ものせてほしい。」／（教育学部）「履修案内で「文法経」とだけかかれてもわかりません。」／（理学部）「履修案内の時間割表のテーマ別・一般科目以外の科目も、シラバスの頁番号をのせてほしい。」／（医学部医学科）

「時間割の作り方を記すべき (ex) 1. 基礎、専門を埋める 2. 英語を入れる 3. 第 2 外国語を入れる 4. 教養を所定単位を満たすように入れる etc...」／（医学部保健学科）「履修案内の構成がよくない。初めて読んだ人はさっぱりわからない。自分で時間割表を立てるときにスムーズにできるように、手順を書いておくとよいと思う。」／（医学部保健学科）

「よりはっきり指定必修科目がわかるような書き方をしてほしい。」／（薬学部）「授業時間割表でテーマ別、一般科目にはシラバスに対応する頁数がのっていたが、総合、言語、基礎科目にはシラバスに対応する頁数がのっていなかったの、のせるべきだと思う。」／（薬学部）「授業に出てはじめて分かったことが多い。単位の条件などだからもっと詳細にしてほしい。」／（工学部）「もっと図や重要部分の大文字を多用してほしい。特に今、自分は何日までに何をすればいいかわかりにくい。（行動をするべき）時間の流れにそって、説明してもらえるといい。ようは、パッと見てすぐにこれとこれをしなければならないと分かるような感じである。」／

（工学部）「履修手続のところは初めて見る人（1 年）には分かりにくいのでそこだけは図を大きく分かりやすく書いてほしいです。」

○『シラバス』に開講場所や科目番号を付けてほしい。(24)

（文学部）「履修案内だけでなく、シラバスにも使用教室を掲載しておいてほしい。」／（法学部）「シラバスにも開講場所や科目番号をのせてほしい。」／（理学部）「シラバスにはなんで場所と科目番号がのっていないのですか？（シラバスと履修案内を行ったり来たりで大変です）」／（医学部保健学科）「シラバス

にも科目番号を書いてほしい。受講票へ記入しにくいから。」／（薬学部）「シラバスで、教科書、参考書の値段が書いてあるものとなないものがあったが、できれば全部書いてほしい。シラバスにも科目番号を書いてほしい。」

○『シラバス』がわかりにくい（８）

（法学部）「シラバスをもっとくわしく書いてほしい。」／（教育学部）「英語の先生の外国人教官の説明が訳さないとわからないのがいやだった。」／（教育学部）「シラバスの言語の部門で、中国語は教官名と教科書名しか書かれておらず、授業の特徴が分からなかったために、誰のどの授業を選ぶべきなのか分からなかった。」／（教育学部）「シラバスの科目説明で、すでに分かりにくい専門の言葉の使用があり、わかりづらかった。」／（教育学部）「文系の生徒をうけつけないのなら、シラバスにきちんと「理系限定」と書いてほしかった。」／（医学部保健学科）「シラバスはそれぞれの分野ごとで、曜日別になっているとわかりやすいと思う。授業計画がたてやすくなると思う。」／（工学部）「英語で授業内容がかいてあるものは読みにくい。」／（工学部）「授業内容の一部が書かれていない事がある。」

以上は学生の自由記述を分類したものである。ここでは『履修案内・授業時間割表』、『シラバス』に関するわかりにくさ、改善点の指摘などの要望が出されている。この点に関して履修制度改正とは根本的に違う問題なので、わかりやすくすることを前提とした文章作りは可能であり、来年度に向けて改善すべき課題である。なお、この自由記述をした学生には以下の意見があると要約できよう。

『履修案内・授業時間割表』についての要望では上記のように「履修案内の時間割表のテーマ別・一般科目以外の科目も、シラバスの頁番号をのせてほしい。」というものや時間割の作り方について手順を示してはどうかといった具体的な提案もあった。また、図や表を挿入する案や読みやすいレイアウトにしてほしいといった要望があった。

『シラバス』に関しては開講場所や科目番号を付けてほしいという要望が強い。『シラバス』がわかりにくいといった意見では、科目によってより詳しい説明を求めていること、言語科目の英語について原文で記述されており訳す手間がかかるといったこと、言語科目の中国語は授業の特徴がわからないといったこと、わかりにくい専門用語の記述があったこと、シラバスに書かれた対象学生欄の記述と実際の受け

入れ学生との関係に整合性を持たせてほしいという要望、科目によっては授業内容の一部が記載されていないという事実があり、今後は改善してほしいといった意見もあった。

6. 2001年度前期教養的科目履修登録に関するアンケート調査結果のまとめ

以上、アンケート結果の概要を報告してきた。すでに、個々の箇所では記述しているので改めて記述する必要はないと考えるが、特徴的な点を以下にまとめておく。

2001年度前期教養的科目履修登録に関するアンケートの結果、優先受講票制度自体は全体の93.5%の学生が今後も継続すべき制度であると高く評価しており、実際の履修登録時にも優先受講票交付願を申請限度の3科目申請している学生が85.84%も存在している。しかしながら、3科目全ての優先受講票を交付された学生は62.42%であり、全ての者がこの制度の恩恵を完全に享受していないことがわかった。優先受講票を交付されなかった科目の履修登録でも抽選等により履修希望していたのにもかかわらず履修登録できなかった科目が1科目以上あった学生は79.0%にもぼっている。また、優先受講票制度の申請限度科目数を現在の3科目からさらに増加を望んでいる学生は60.5%存在する。教養的科目の履修登録数は14科目が49.5%と最も多い。このことは教養的科目の1年前期履修単位制限が24単位以下と関係がある。つまり、1単位の言語科目を4科目・4単位、2単位の授業科目を10科目・20単位の計24単位という履修単位制限ぎりぎりまで履修登録する傾向があるということである。自由回答では、自分の履修したい科目が自由に履修できない不満をもっていることがわかった。科目の適正人数に関する疑問（教室変更で解決できるのではないか）、公正な抽選が行われないことに対する不満、教官の優先受講票制度を含めた履修登録制度の理解不足等の履修に対するストレス及び不満が鬱積していることがわかる。今後は向学心に燃えた1年次学生の大多数が自分の履修希望科目を履修できるよう制度の改善が重要な課題となろう。